

歴史・対話・街の創出

—市川オープンミュージアム構想—

山 口 徹
湖 沢 順

プロローグ：歴史をつくる

東京方面から千葉にすすむ JR 総武線は、隅田川や荒川が形成した広大な扇状地をぬけて江戸川にさしかかる。車窓からは、周囲より一段高い丘陵を北東方向にのぞむことができる。江戸川西岸にはない北総台地の縁辺にあたり、真間山弘法寺がその上にたつ。スタジイやタブノキといった照葉樹が四季をとおして斜面を覆い、江戸川鉄橋を渡りくる人々はその緑に市川駅の近いことを知る。

その台地のふもと、真間の地に手児奈霊堂と呼ばれるお堂がある（図1）。奈良時代の歌人、高橋虫麻呂や山部赤人が万葉集に詠みあげた伝説の娘子「手児奈」を祀る祠堂である。

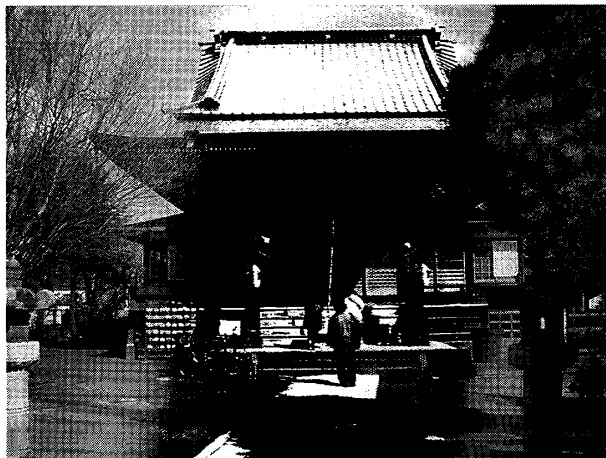


図1 手児奈霊堂

—青衿をつけただけの麻の着物をまとい、髪さえろくに梳かさず、履物さえはかない貧しい娘であったが、その顔は満月のように輝き、都の貴婦人より美しいと言い寄って恋い慕わない男はいないほどだった。そのことをかえって心苦しいことと思ひ沈んだ手児奈は、ついに真間の入江の波間に身を投げたという。—

こう詠った虫麻呂や赤人と同じころ天平9年(737)に、高僧として名高い行基もまたこの地を訪ね、手児奈を供養するために真間の台地のうえに求法寺(後の弘法寺)を建立したという(千野原 1977:40)。おそらくは在地に語られていたローカルで素朴な伝承が万葉歌人によるテキスト化をとおして都人むきに書き換えられるとともに、求法寺の建立によってその物語が真間の地に固定されたといつてよい。

いつのころからか真間山のふもとにも手児奈を祀る小祠が建てられ、江戸時代に入ると時々には廃れ時々には再建・改築されてきた。安政5年(1776)には、上田秋成が真間を舞台にした怪異小説「浅茅が宿」を『雨月物語』のなかで発表し、手児奈の伝説をふたたび世に知らしめた(上田 1776)。おくれること30年あまり、西暦1800年代に入る文化文政期には、安産子育て信仰と結びつくことによって現在みる手児奈の霊堂が完成した(千野原 1977:51-55)。恋い慕う男たちに思い悩んで身を投げたはずの手児奈の神に、今では「孝子受胎」「無事安産」「健児育成」に加えて「良縁成就」や「受験合格」までさまざまな願が掛けられていることをお堂脇の絵馬が物語っている。手児奈伝説の再生産と書換えをめぐる行為は今なおつづいている。

過去の諸事実を拾い集め、出来事や構造のクロノロジカル(通時的)な連鎖を示すという歴史研究の一般的なイメージがある一方で、個別的で一回的な出来事から、その意味内容が史料やモニュメントに書き刻まれることによって歴史が創出されてゆく過程そのものに焦点をあてる研究がある(関本 1986)。エスノヒストリー研究のなかから生まれたこの視点は、古くさく見える諸慣習の多くが往々にして近い過去に「創られた伝統」であることを指摘したイギリスの社会史家ホブズボウム(1983)の主張にもつうじる。フィクションかノンフィクションかにかかわらず、新しい目的のために引き合いに出された「過去」は、反復され形式化されることによって「伝統」として定着するというわけだ。こうした視点に立てば、手古奈伝説

の生成と再生産もまた「歴史」や「伝統」のインベンション（創出）と見なすことができる。

弘法寺の高台から望む今の真間は、家並みと舗装路からなるありふれた東京近郊の景色だが、その街並みを実際に歩いてみると、歴史の生産・再生産に活用できそうな過去の生活の痕跡や景観の断片をところどころに見出すことができる。「オープン・ミュージアム」とは、こうした「発見」の街歩きに人々を誘い、それによって多様な対話を生み出すための構想である。それはまさに現在の目的のために、万葉歌人らに倣いつつ、しかし異なる方法で、地域に蓄積されてきた素材を用いて新たな歴史を創出してゆく試みである。文化を生み出す社会的実践と位置づけてもよい。

以下ではその具体的な事例として、市川市北西部を対象に取り上げ、街歩きに人々を誘うための学習シナリオを提示する（第1章）。次に、街歩きを支援するシステムとして、携帯電話によって情報を受信する方法を提案するとともに（第2章）、小規模ながら2004年2月に実施した社会実験について報告する（第3章）。最後に、オープンミュージアムの仕掛けが生み出すであろう対話を街づくりに生かす方向性について展望しよう（エピローグ）。

第1章 「場所」を共有する—学習シナリオの用意—

都市は、多様な立場の人びとが行きかう空間である。さまざまに異なる関心をもつ主体間に対話を生み出すためには、どのような学習シナリオが効果をもつだろうか。世代や関心の違いを超えて共有しうる対象の1つは、その人びとが生活・活動しあるいは訪れる場そのものであろう。とすれば、博物館や教室のなかではなく、生活と活動の実際場で、その場所にかかわる話題の提供がオープンミュージアムを構成する仕掛けとして浮かび上がる。

ところで地理学の「場所」概念は、人間の生活や活動を支える所与の物理的条件や環境として言及されることもあれば、生活や活動の主体が何らかの意味を付与することによって立ち現れるある種の表象として扱われることもある。しかしながら、この二分化された局面のどちらか一方を無視することは、本来場所と切り離しては



図2 学習シナリオが想定する街歩きルート（市川駅～真間山弘法寺）

ありえない経験，経験と切り離してはありえない場所のいずれかを捨象することになる（Entrikin 1991，大城 1994：170）。ここでは、「場所」の両義性を論じたエントリキンに倣って，自然の営力（自然科学）と人間の営為（人文社会科学）の両面に目配りした学習シナリオを組み立てることにする。なお，学習シナリオが想定する街歩きの範囲として，市川市北西部のうち JR 市川駅～真間山弘法寺までの地域を選択した（図2）。

1-1. 過去にさかのぼる「三本松」

市川北西部でもっとも開けた JR 市川駅北口付近にさえ，過去の景観をしのばせる「まちの記憶」を見つけることができる。「三本松」はその1つである。

北口を出てダイエーを右手に見ながら，I&I ロードに入る。ミスタードーナツ横のカネコビルを抜けると，かなり年季の入った木造二階建て家屋が視界に入る。テレビやタウン誌で餃子の店として時おり取り上げられる「ひさご」が1階で店を構えている。その店を横に見ながら，終戦直後のバラックをおもわせる狭い屋根つき通路を抜けると，国道14号線が目の前にのびている。中央分離帯に植栽された貧弱な落葉樹の根本に「三本松」と刻まれた碑が据えられている（図3 a）。交通量が多いため渡ることもできず，その碑に気付く人は少ないようだが，アーケードと三

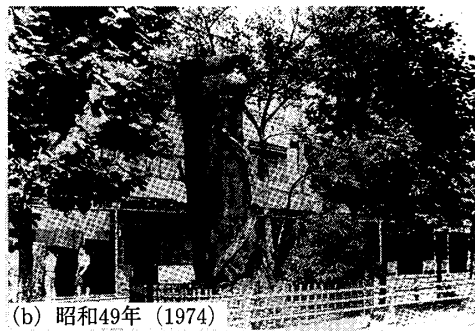
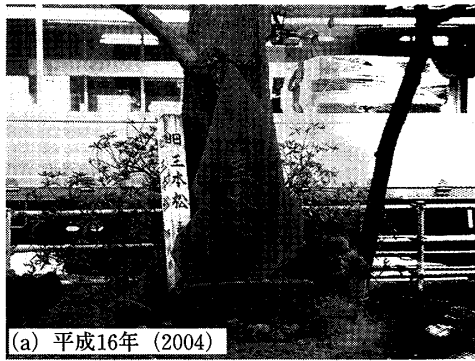


図3 伐採された「三本松」

写真 (b) (c) は安藤 他 (編) 1995「写真集／市川・浦安の昭和史」(千秋社) より転載。

本松は、過去にさかのぼるまち歩きの出発点として活用できる。

昭和49年(1974)にはまだ、碑のかわりに三本松の巨大な切り株が残っていた(図3b)。その巨木が切り株に変わってしまったのは昭和33年(1958)のことで、勢いを失った三本松が国道14号線に倒壊する危険を防ぐために伐採されたらしい(図3c)。その3年前、昭和30年(1955)にはまだ国道14号線の中央に三本松が立ち、江戸川に架かる市川橋から渡ってきた人びとを出迎えていた。市川の街に大きな被害をおよぼした昭和20年(1945)2月の空襲を耐え抜いた松並木だったが、増え続ける交通量に対応するため国道14号線が拡幅され、おそらくは排気ガスの影響で、三本松をはじめ数多くのクロマツがその樹勢を失っていったのだろう。

さらに時代をさかのぼって明治後期から昭和初期の国道14号線を見ると、現在とは大きく異なる景観がそこにひろがる。三本松の由来となった3本の幹のうち1本が、佐倉道あるいは成田街道(山本 1987)と呼ばれていた未舗装の国道上に張り出していた(図4)。所伝によると、明治6年(1873)ごろに下総の地を行幸した明治天皇が乗馬で三本松の下を過ぎたとき、「見事な松よ」と嘆賞したという(いちかわ・まち研究会 1999)。写真資料から察するに、少なくとも1904年から1931年

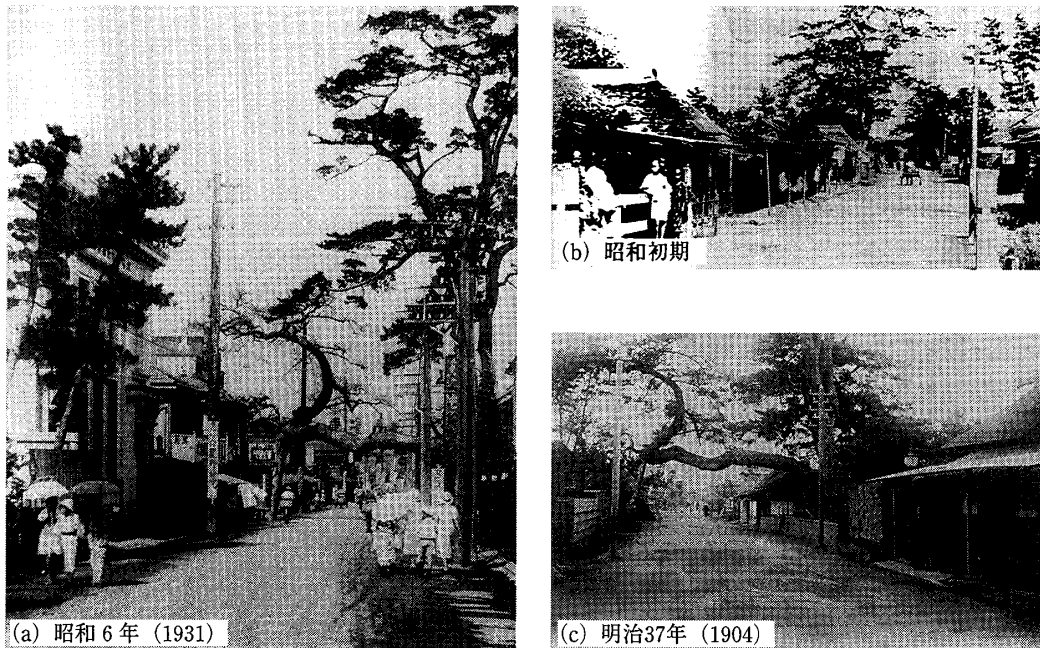


図4 市川市のシンボル「三本松」

写真 (a) (b) は安藤 他 (編) 1995「写真集／市川・浦安の昭和史」(千秋社)より転載。
 (c) は市川市史編纂委員会 (編) 1974「市川市史・第二巻」より転載。

までの27年間、三本松はこの地域のシンボルの1つだったとみてよい。

1-2. 新田村と海の名残

三本松を後にして国道14号線を本八幡方向にほんの少し歩くと、ちょうど消防署を過ぎたあたりに「自然幼稚園」の看板がみえてくる。その角を左におれて小道をすすむと、そこにクロマツの濃い木立が現れる。奥には「ジゾウヤマ (地蔵山)」と呼ばれる共同墓地が広がる (図5)。

墓地の中央には地蔵を刻んだ巨大な石柱が据えられ、その背面には田中正成という人物が明暦元年 (1655) に没したことが記されている。田中家は市川新田村の名主であった。利根川の大変流事業にともなって江戸川が開通した寛永年間ころ、このあたりに新田が急速に開発された。市川新田は、田中家の祖先「田中正成」の主導によってこの時期に開かれた村の1つである (市川市史編纂委員会 1974: 313-316)。

佐倉道と呼ばれていた国道14号線沿いには、市川新田を含む複数の村が展開していた。ジゾウヤマ同様に、市川村オオダツチョウ、平田村オラントウ、八幡村ゴウ



図5 クロマツの木立に囲まれた「地蔵山墓地」

ドラントウなどの共同墓地が村々の配置を今に伝える（鈴木恒男 1992：52）。これらの村の屋敷地は市川砂嘴という乾いた土地にあった。ジゾウヤマ墓地で足元に目をやると、遠浅の海岸のように細かい砂地である。今より気温が温暖だったおよそ6000-3000年前に、沿岸流によって浅い海に堆積した砂嘴の名残である⁽¹⁾。その範囲は微高地となっており、低地との境界には比高差2メートルほどの坂を今もところどころに認めることができる。新田開発の場となった低地に比べて水はけが良いので、古くから居住や畑作に利用されたようだ。

1-3. 「真間川」の誕生

ところで、市川砂嘴の北側には今は宅地が広がっているが、もとはまったく異なる景観であった。北総台地の谷津（開析谷）を南流してきた国分川・大柏川の水は東西にのびる砂嘴に阻まれ、そこで流路を西に変えて真間川となり、最後は江戸川に流下していた。真間川の河床はほとんど勾配がないため、砂嘴の北側はどうしても滞水しやすく、台風の季節にはしばしば水害を被ってきた。昭和33年（1958）に関東地方を襲った狩野川台風は、西伊豆だけでなく真間の地にも大きな被害をおよぼした。写真は、「いちかわ文学の道」として知られる桜土手公園からのぞむ真間3丁目付近の洪水状況である（図6）。

(1) 国土地理院発行1/25,000土地条件図（東京北東部）を参照すると、市川砂嘴は、中山の台地下から江戸川まで西に伸びている。台地の地下におよそ12万年前に堆積した海成層（成田層）の砂が海進期の波で削られたのち、沿岸流によって西に移動したのであろう。

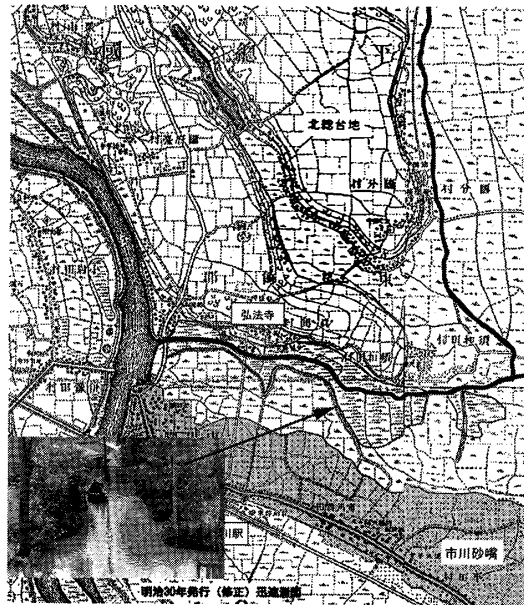


図6 北総台地と市川砂嘴の間を流れる真間川(明治30年発行・修正の迅速測図)
 水害の写真は安藤 他(編)1995「写真集/市川・浦安の昭和史」(千秋社)より転載。

真間川のコンクリート護岸は人と川の間を物理的に遮断するため評判があまり良くないが、洪水対策を目的とした河川改修の結果であることも忘れてはならない。事実、真間地域を治水し耕地化する試みは、古く大正年間にはじまっている(市川市史編纂委員会 1975a: 454-463, 鈴木 1992: 54-55)。このときの事業は、真間山から須和田にかけての台地部を削り取り、その土砂で湿地を埋め立てるものだった。溜まり水を東京湾へ南流させるために、市川砂嘴を横切る新たな水路も設置された。こうして大正8年(1919)に、両端(江戸川と東京湾)に河口を持つ真間川の珍しい流れが治水の結果として生み出されたのである。

当時の埋立てはかなり大規模な事業だったようだ。工事が完了する3年前の大正5年(1916)、手見奈霊堂前の亀井院に北原白秋が妻章子とともに投宿したことがわかっている。白秋にとって生活に困窮をきわめた一時期だったというが、わずかひと夏の1ヶ月半ほどで小岩に転出している(西川 1970: 20-22)。その理由を、埋立て工事の喧騒と埃に求める説もある(鈴木 1992: 55)。

1-4. 水辺の景観「真間の入江」

埋立て以前の真間をしのばせる名残は今でも見つけることができる。1つは手見

奈霊堂脇に残る小さな池である。真間山の台地上に降った雨が地下に浸透し、崖下からの湧水が高水位の地下水とともに窪地に滞水している。もう1つは、真間川にかかる手児奈橋近くに設けられた浮島弁財天のお堂である。弁財天は七福神の一神で富貴・名誉・福寿を恵む神として信仰を集めるが、もとはヒンドゥー教で川の女神とされるサラスヴァティー神に由来する（西尾 2001：179）。それゆえ、弁財天も水と関わりのある女神であり、しばしば周りを水で囲われた浮島に祠堂が建てられる。

真間の弁財天信仰がいつごろ始まったのか定かではない。明治12年の神社明細帳や昭和41年の宗教法人名簿には名が出てこない（市川市史編纂委員会 1974：668-670）。しかし、真間の東隣の須和田には弁財天と呼称される小字が認められる（市川市史編纂委員会 1974：付図）。祠堂は無くとも、治水を願う住民のあいだに弁財天信仰があったのかもしれない。

手児奈霊堂の池や弁財天信仰が示唆する景観は、明治末年に撮影された1枚の写真によって生き活きとよみがえる（図7）。右側奥に真間山の台地が位置し、その麓に手児奈霊堂らしき建物が写っている。真間の地は葦で覆われた湿地で、その間



図7 耕地整理前（明治末年）の真間の湿地

安藤 他（編）1995「写真集 市川・浦安の昭和史」（千秋社）より転載。

を二筋の細い流れが蛇行している。大雨が降るとすぐに氾濫し、日照りが続くと地下水が急速に下がって乾燥する土地で、人の手が入ることはほとんどなかったという（安藤 et al. 1995 : 49）。

明治17年（1884）に浮世絵師の小林清親が描いた「下総真間つき橋」は、先の写真からうかがえる景観に色を与えてくれる（市川市史編纂委員会 1975b : 原色図版2）。急須をもった農家の娘が砂州上の小径を歩いている。その向こうは完全な水辺で、ところどころに中洲が浮く。その中洲を結ぶように継橋が架けられ、その先に弘法寺の山門がのぞいている。それはまさに、手児奈伝説が語られてきた「真間の入江」の景観である。

1-5. 聖俗のはざま

歌川広重が弘法寺の山門から描いた1枚の錦絵がある（図8）。広重最後の傑作とうたわれた『名所江戸百景』の一場面で、「真間の効用、手児奈の社、継ぎはし」と題された安政4年（1857）の作品である。解説によれば、真間の入江を見下ろす弘法寺は江戸近郊随一のモミジの名所で、秋の日に万葉の古跡と紅葉を目指して、「江戸の騷人はるばる舟で競い訪ねた」という（暮しの手帳社 1993 : 76-77）。



図8 真間山弘法寺からの景色（安政4年と現在）

弘法寺の山門をのぼったところで、後ろを振り返ってみる。きわめて人為的な地形改変の結果である低い家並みが眼下に広がるけれども、「街歩き」の後ならば、広重や清親の描いた景色がそこにイメージできる。市川砂嘴に立地する村々の日常生活と手児奈霊堂や弘法寺が配された祈りの場を、幅1 kmほどの湿地が分けている。はからずも人の手がほとんどはいらなかったその湿地に、手児奈の伝説が繰り返し語られてきた。オープンミュージアムがそこに魅力的なシナリオを付与したとき、家並みと舗装路で覆われた一見均質な空間が歴史の再生産の場として蘇ることになるのではないだろうか。

第2章 「発見」を助ける—携帯電話による情報受信システム—

オープンミュージアムは学習をコンテンツにする街歩きの仕掛けであるから、通常の博物館と同様に、副次的資料を効果的に配しながら理解を促さねばならない。しかも、性や年齢、職業を異にする多様な訪問者に的確な場所で情報提供することが重要である。より良いシナリオへの書換えや新しいシナリオの追加を促す仕組みであればさらによい。そのためにも、市川という街自体が情報を常に提供しながらミュージアムとして機能するとともに、学習シナリオの企画者、まち歩きの訪問者、そこに生活する人びとのあいだに多方向的なコミュニケーションを生み出し、その情報を随時蓄積してゆくデジタル・アーカイブ・ネットワークの機能も視野に入れておきたい。そうすれば、オープンミュージアムの「学芸員」として地元の人びとが主体的にかかわってゆくことに展開するかもしれない。

ここでは上記の枠組みを念頭におきながら、近年普及率が急速に高まるとともに、機能の拡張が著しい携帯電話端末を有効利用した情報受発信の方法について提案する⁽²⁾。

システムの基本的な目標は、携帯電話に搭載されるインターネット機能を活用し、ネットワーク上に用意した情報を必要な場所で手軽に受信できるようにすることで

(2) 電気通信事業者協会 (<http://www.tca.or.jp>) によれば、2004年8月末現在の携帯電話総台数は8,300万台を超え、このうち85%以上はネット接続が可能な端末である。また、大量の情報送受信が可能な第3世代携帯のうちFomaの契約台数が2004年7月現在で500万件を突破している (<http://www.nttdocomo.co.jp/info/new/release.html>)。

ある。このうち、ネット情報の受信についてはさして問題はない。しかし、必要な URL を入力しなければならない点に難がある。気軽に文字が打てないほどに小型化した携帯電話の特性に起因する問題である。熟練した者ならば、かなりのスピードで文字入力が可能だろうが、オープンミュージアムは幅広い年齢層を想定するから、携帯電話の使用に慣れない人でも気軽に扱える汎用性の高い入力方法を考えねばならない。

まず、GPS (Global Positioning System : 以下 GPS と略記) を活用した位置情報による自動受信システムがある。この方法ならばとくに文字を入力する必要もなく、特定の場所に立てば、そこで必要な情報が取得できることになる。ただし、この方法を検討する過程でいくつかの問題点も浮き彫りになった。1つは、携帯電話の GPS 機能用に提供されている地図精度 (解像度) が、都心部の外に位置する市川では街歩きにはまだ不十分な点である。衛星からの位置情報を取得することが建造物によって阻害される可能性もある。また現時点 (2004年3月現在) では、多くの携帯電話で GPS アンテナを別途購入する必要がある。以上の理由から、GPS を利用することは得策ではないという結論に至った。しかしこの方法は近い将来に有効な方法として再検討されるであろうことは記しておきたい。

そこで今回提案するシステムは、2003年後半より NTT Docomo およびボーダーフォンの携帯電話に実装されはじめた「QR コード」読み取り機能を利用する方法である⁽³⁾。QR コードは POS システムのバーコードと同じ二次元コードだが、横方向と縦方向に並べたマトリックスでバーコードを表すことによって、扱える情報量が飛躍的に増大した (図9)。通常のバーコードに比べて数十倍から数百倍の情報量をもち、英数字以外に日本語漢字情報もコード化できる。さらに強力な誤り補正機能を持つことで、コードの一部に汚れや破損があってもデータの復元が可能である。野外での利用が前提になるオープンミュージアムに適した特性である⁽⁴⁾。

(3) QR コードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標である。詳細は <http://www.denso-wave.com/index.html>, ならびに <http://www.qrcode.com/> 参照。

(4) この他に、小スペースへの印字、360° どの方向からでも読み取り可能、連結機能をサポート、AIM International (国際自動認識工業会) 規格として制定 (ISS - QR Code), JEIDA (日本電子工業振興協会) 規格として制定 (JEIDA-55), JIS (日本工業規格) として制定 (JIS X 0510), ISO の国際規格として制定 (ISO/IEC18004) といった特徴をもつオープンな 2 次元コードである (<http://www.qrcode.com/> 参照)。



図9 QRコード

さらに特記したい点は、QRコードを開発した企業が特許権を行使していないため、個人・法人ともにQRコードを自由に使用できることと、コード作成のためのフリーウェアソフトが提供されていることである⁽⁵⁾。オープンミュージアムの情報提供に必要なシステムは、きわめて安価に構築できる。企画側は、学習シナリオに沿った適所にQRコードを配置するだけで

よい。街歩きの訪問者は、コード化されたURLを携帯電話のカメラで読み取り、解説文・写真・地図などの補助資料を受信する。配信側には容易に情報を書き換えられる利点があり、受信側は簡便に情報にアクセスできる利便性を手に入れることになる⁽⁶⁾。

第3章 「対話」を生み出す—社会実験ポタライブからの視点—

第1章に記したシナリオは3年間のフィールドワークとブックワークから生まれた。しかし、オープンミュージアムとして街歩きの実際のルートを設定するには、素材の取捨選択や追加が必要になる。なによりも教室での学習ではなく、街歩きによって「感じて学ぶ」機会を提供することが目的であるから、シナリオ自体の魅力を追求しなければならない。加えて、オープンミュージアムを内外に周知するための仕掛けが求められる。

以上の観点から、プロの劇作家・岸井大輔氏に研究プロジェクトへの参加と、オープンミュージアム社会実験の実施を依頼することにした。岸井氏はかねてより、演

(5) QRコード作成のフリーウェアは、http://www.nttdocomo.co.jp/p_s/imode/make/barcode/index.htmlで提供されている。また、株式会社デンソーウェーブにて有料のソフトウェアもダウンロード販売されている(<http://www.denso-wave.com/index.html>)。

(6) 2004年6月21日付けの日本経済新聞によると、歩道や建造物のなかにICチップを埋め込み、音声や画像情報で目的地までの経路や施設などの位置情報を携帯電話に提供するシステム開発が政府によって進められているという。ICチップの設置が容易であれば、オープンミュージアムの情報配信・受信方法としてGPS以上に魅力的である。

劇の空間を劇場から街に移し、ポタライブの名称で、プロの舞踊家とともに街歩きの有料ツアーパフォーマンスを三鷹市・武蔵野市・横浜市で実施してきた実績をもつ⁽⁷⁾。そこで、同氏に主体的に関わっていただくために「ポタライブ市川編」として2004年2月22日に社会実験を計画してもらった。

3-1. ポタライブ市川編の概要

ポタライブのシナリオ作成ならびに実施ルート設定にあたっては、オープンミュージアムの学習シナリオをベースにしながら共同調査と議論を重ねるとともに、岸井氏自ら数度にわたって街の取材を実施した。シナリオとダンスのコラボレーションを生み出すために、舞踊家の方々にも取材に同行してもらうとともに、3回にわたってリハーサルをおこなった。

2月22日の本公演は13:30にJR市川駅北口改札前に集合した後、14時ごろから3時間ほどかけて真間山弘法寺にいたる街歩きを実施した。当初の設定では定員10名程度を見込んでいたが、訪問者は最終的に14名となった。また、安全確保・交通整理・住民への説明を担ったスタッフならびに千葉商科大学の学生アシスタントと上演者を加えると、総勢30名近い人間が街歩きをおこなったことになる。

本公演には、「発見」の街歩きに岸井氏が同行して街の学習シナリオを訪問者に語るパフォーマンスに加え、弘法寺までの途上にある浮島弁財天で、手児奈伝説や小説「浅茅が宿」などをモチーフとするナラティブと新作舞踊のパフォーマンスが組み込まれた。まさに、生活世界の素材を活用しながら新しい「伝承」を生み出す社会実験であった(図10)。

3-2. 補助資料受信システムの実験

ところでオープンミュージアムでは、学習シナリオにかかわる情報を常態的に提供することが求められる。そこで、第2章に記したシステムの実装実験を「ポタライブ市川編」にあわせて実施した。

配信情報の重要な役割は、文字情報による解説とともに、街歩きを俯瞰的に把握する視点と特定の場所から「過去」に遡る視点の両方を訪問者に提供する

(7) <http://kurumin.dydns.org/potalive>



図10 「ポタライブ市川編」パフォーマンスの一場面

ことにある。そこで、岸井氏の語りを補完する地図・絵図や過去の写真を携帯電話でストレスなく受信できるように加工した。特に地図情報に関しては Macromedia Flash を用いてデジタル加工し、アニメーションによる図解の形をとった⁽⁸⁾。

こうした補助資料をネット上に配置し、情報ごとの URL を QR ファクトリーというフリーウェアでコード化した。時間に制約されない再現性を実現するためには、作成した QR コードを適所に配することが本来ならば望ましいが、今回は岸井氏が配布する紙媒体にコードをレイアウトする方式とした。

訪問者が情報を受信する状況として、2つの場面を設定した。まず、オープンミュージアムが目指す市民学芸員による対面式の解説を想定して、岸井氏の「語り」にあわせて補助情報を取得する場面である。次に、オープンミュージアムの常態化を想定し、訪問者各自が自由に散策しながら紙媒体の地図に配された QR コードから情報を取得する場面である。なお、QR コードによる情報受信を訪問者に体験してもらうために、株式会社 NTT Docomo 千葉支店法人営業部のご協力を得て 505is ならびに 900i の 2 機種 10 台を無償で提供いただき、千葉商科大学政策情報学部学生有志が操作方法を随時サポートした。

3-3. 訪問者へのアンケート

「ポタライブ市川編」パフォーマンスの詳細については別稿に譲ることとし、来

(8) <http://www.macromedia.com/jp/software/flash/>

場した方々のアンケート結果（14人分）について報告する。アンケートの設問は8項目で、そのうち選択式5問、数値記入1問、自由記入2問である。設問と結果は以下のとおりである。

①この公演を何で知りましたか？

- A：出演者・スタッフから……………13
- B：市川市街で配布したチラシを見て…………… 0
- C：インターネットでポタライブのサイトを見て…………… 1
- D：広報「いちかわ」を見て…………… 0

今回のポタライブはオープンミュージアムの実験を兼ねていたため、リハーサル途上で出会った数多い市民の方々にチラシを配布した。また、市川市の協力を得て「広報いちかわ」に開催情報を掲載していただいた。残念ながら、これらの周知方法（B、D）は市民の方々の来場を誘う効果をもたなかったが、ポタライブ、オープンミュージアムともに、その仕掛けや目的がまったく浸透していない現状においてはいたしかたない。総勢30名近くに達した街歩きは、ルート付近の市民の方々から警戒心を含めて大きな関心を持たれたことは事実である。今後オープンミュージアムが浸透し、ルート上の要所で「語り部」の役割を果たしてくれる市民学芸員が出てきたとき、市外からの訪問者と生活者とのあいだに対話が創出されるだろう。実際に今回の実験においても数は少ないが、市民の方から話しかけられた来場者が3人いた（設問⑥参照）。

②ポタライブのルートでおもしろかったパートは？（複数回答可）

- A：JR 市川駅～三本松 …………… 2
- B：自然幼稚園～地藏山墓地…………… 4
- C：市川真間駅～浮嶋弁財天…………… 8
- D：手児奈霊堂～真間山弘法寺…………… 5

ポタライブ実施側として、全コースを4つのパートに分類した。AのJR市川駅～三本松は来場者を街歩きの世界に誘う導入編と位置づけ、近代的な現在の駅舎から次第に過去にさかのぼる感覚が得られるよう工夫した。その出発点に三本松をお

いたが、国道14号線の喧騒に加え、歩道における一般通行者への配慮がすべての参加者に求められたため、岸井氏の語りに集中することが若干困難だったかもしれない。B以降は比較的街歩きに適した市街地となる。このうち、(B)地蔵山墓地前と(C)浮嶋弁財天前の地点では、感じて学ぶ街歩きの「感じる」を促すために、2人ないし3人の舞踏家によるパフォーマンスが披露された。設問②の回答結果は、この仕掛けに効果があったことを示唆する。(D)手兎奈霊堂～真間山弘法寺は、街歩きの自由度を高めるために岸井氏の解説をはぶき、携帯電話で受信できる解説文と地図を頼りに訪問者が各自散策するパートと位置づけた。ポタライブ等のパフォーマンスを日常的に開催することは現状では難しい。しかし、携帯電話に情報を配信するシステムは当然のことながら常態化しうる仕掛けであり、ここにオープンミュージアムの目論見がある。

③紙媒体（コピー）の情報は「感じて学ぶ街歩き」に役立ちましたか？

- A：とても…………… 9
- B：ある程度…………… 5
- C：それほど…………… 0
- D：全く…………… 0

④ケイタイ電話でQRコードを読みとる方法はめんどろでしたか？

- A：とてもめんどくさい…………… 3
- B：少しめんどくさい…………… 6
- C：簡単だった…………… 5

⑤ケイタイ電話に配信された情報は「感じて学ぶ街歩き」に役立ちましたか？

- A：とても…………… 6
- B：ある程度…………… 3
- C：それほど…………… 3
- D：全く…………… 2

今回の社会実験では総じていえば、紙媒体の情報が携帯電話に配信された情報より来場者に受け入れられた傾向を読み取ることができる。自由記入欄には、「QR

コードを読み込む手順が面倒]、「QRコードを連続して読み込めない」、「携帯電話のカメラでQRコードを捉えることが難しい」、「前の画面に戻れない」、「他の画面と比較できない」、「アクセスが遅い」といった問題が指摘された。「感じて学ぶ」街歩きの補助ツールとしては、いまだ実験段階との感はいなめないが、問題の多くは、ネット上での情報提示の工夫とコンテンツの充実によって改善が期待できる。なによりも、いつでも誰でも来場できるオープンミュージアムの仕掛けとしては、紙媒体の資料をたとえば駅前に常置したり、解説用看板を各所に設置するよりも、携帯電話を利用することによって情報取得と情報書換えの利便性を確保することがのぞましい。

携帯電話のi-modeに代表されるパケットシステムを利用するもうひとつの重要な意味として、コンテンツに使用料を発生させるビジネスモデルでもあることも付け加えたい。すなわち、コンテンツの製作・管理機関（ミュージアム側）や市民学芸員に携帯電話のアクセス料から料金が支払われるモデルである。また、動画コンテンツが扱える携帯であれば、街中に張られたQRコードを読むことで、過去に行われたパフォーマンスをその現場で閲覧することも可能になる。

⑥街歩きの途中で市民の方々に話しかけられた方は、会話の内容について記入してください。

今回の実験では来場者の安全性を確保するために、学生アシスタント8名に参加してもらった。フィールドワーク実習を兼ねていたため、関心を寄せる市民に積極的に趣旨説明することをアシスタントの役割に加えた。訪問者と市民のあいだにも若干のコンタクトが発生したが、学生アシスタントの存在が両者の対話を阻害した可能性もある。「感じて学ぶ街歩き」の仕掛けを浸透させる目的と、対話の生成というオープンミュージアムの目的を両立させるには、学生アシスタントの育成とさらなる工夫が求められる。また、「市民→訪問者」ばかりでなく、「訪問者→市民（学芸員）」の語り掛けを促す仕掛けの開発が今後の課題である。

⑦今回のポタライブに値段をつけるとすると、いくらになりますか？

今回の実験では、ポタライブ側の意向を尊重して来場者に2,000円を課金するこ

とにした。「ポタライブ市川編」を経験した来場者が2,000円という料金にもつ感想は、市場取引にのらない「感じて学ぶ街歩き」の定性的価値を数量的に把握するための指標となる。実施側の手違いもあって回答者は6人にとどまってしまったが、有効回答のうち1件をのぞくと、当初設定した2,000円が妥当な料金として受け入れられた。

⑧ポタライブに参加して、感じたことを教えてください。

演劇を期待して来場した方も多かったが、「感じて学ぶ街歩き」全体を好意的に評価する意見が大勢をしめたと見てよいだろう。また、オープンミュージアムの概要を事前に知っていた訪問者（大学教員）の一人は、教室ではなく現実の場所で、その場所にかかわる情報を取得できる仕組みに、生涯学習やフィールドワーク実習への応用可能性を見出していた。

3-4. 今後の展開

オープンミュージアム構想を提示する上で、本稿第1章では自然の営力と人間の営為が生み出した景観形成史にかかわるシナリオを紹介した。しかし、街のなかに息づく生活世界を活用することによって、地域経済、環境破壊、交通、防災、少子高齢社会など現在のテーマにかかわる素材を「発見」することも可能だろう。多様な分野の知の集積体たる大学は、自らが立地する地域の素材から多様な学習シナリオを構築し、その成果を地域社会に還元しうる可能性を秘めている。

丹波学、京都学、金沢学、東北学といった地名を冠する地域学が近年になって相次いで提唱されている。地域あるいは場をノード（node）とすることによって自然科学と人文社会科学の境界を超克する学であり、ローカルを素材にしながらも人間社会をとりまく一般的なテーマにアプローチする総合学でもある。したがって、多様なテーマの学習シナリオが蓄積されたとき、市川の街はそれ自体が「総合博物館」としての価値をもつことになる。

全国に目を向けると、野外の生活世界自体を学習のための「展示室」と位置づける博物館がすでに存在する。滋賀県立琵琶湖博物館はその1つである。ここでは、「魚、水田、里山など八つのテーマごとに研究を進める」10～70歳まで約120人の地

域住民を準学芸員として位置づける制度が早くも2000年にスタートしたという⁽⁹⁾。オープンミュージアムの目論見は、街に住む生活者のこうした知恵・知識・記憶を学習シナリオの構築に活用するとともに、地域の生活者、域内の大学や博物館関係者、域外からの訪問者、域内・域外のアーティストなど、多様な行為主体のあいだに新しい「出会い」と「対話」を生み出すことにある⁽¹⁰⁾。こうした「対話」の創出のために、携帯電話のインターネット機能によるデジタル情報の受配信と市民学芸員による対面コミュニケーションの双方を有機的に結び付ける工夫が課題である。

すでに触れたように、「場所」を通して多様な主体を結びつけるところにオープンミュージアム構想の根幹がある。それゆえ特定の場所にかかわる写真は、その作製・撮影時期、撮影者を問わず重要な資料（史料）である。各拠点に配置されたQRコードを介して、在地の生活者や訪問者が自らの意思で選択した「その場所」の「我が」写真をネット上に蓄積してゆくならば、ミュージアムとしてだけでなくアーカイブスとして市川の街そのものを活用することになる。アーカイブスへの写真提供によって場所を共有した人びとは、互いに写真を閲覧し合うことによって、各人が「生きる／生きた」異なる時間をも共有することになるだろう。それは、世代・職業・ジェンダー・社会階層を異にする多様な主体の意志や主張を汲み取りながら、残すべき「社会の記憶」あるいはパブリック・ヒストリーを育む作業といってもよい⁽¹¹⁾。補助資料のデジタル情報と対面コミュニケーションをオープンミュージアムの仕掛けとして結びつける方途も、「歴史」を新たに創出してゆくこうした試みのなかから自然に生まれてくるかもしれない。

(9) 滋賀県立琵琶湖博物館では、「一歩先行く博物館像を目指し、地域の自然、歴史、暮らしの情報はフィールドにあり、地域こそが展示室であり、博物館である『地域だれでも・どこでも博物館』を構想」し、2000年に地域住民を準学芸員とする「はしかけ制度」をスタートさせている（日経新聞 2002/6/1 文化欄；<http://www.biwa.ne.jp/~ohmi-net/ouminet/ohminet-41/netoteto/>）。

(10) 市川においても、市内ならびにその周辺の史跡を紹介する「市川案内人の会」（会員20名）がすでに活動している（<http://www.ichikawa-cci.or.jp/c/news.html>）。

(11) アメリカの都市計画研究で著名なドロレス・ハイデンは、「共有された土地の中に共有された時間を封じ込め、市民が持つ社会の記憶を育む力」を「場所の力」として位置づける（ハイデン 2002：33）。すなわち、「人種、ジェンダー、社会階層に関する多様な主張が激しく交錯」（ibid. :28）するとしても、「場所」を介することによって多様な主体を結びつけ、そこに共有されるパブリック・ヒストリーを創出してゆく力である。

エピローグ：街をつくる

市川市では、20年後の街の姿を射程に入れた都市計画の基本方針（都市マスタープラン）策定作業が、市民、学識経験者、行政（建設局都市計画部都市計画課）の協働によって2年ほど前から進められてきた。本報告の執筆者（山口）は北西部地域懇談会の座長を務め、「街づくり」の要素について市民委員の方々と議論する経験をえた。議論のなかで特に印象に残ったのは、諸施設や道路などのハード面以上にソフト面の充実を多くの委員が重視したことである。その結果として、『世代をこえて誰もが「集い・語らい・触れ」あえる市民主体のまちづくり』が地域目標の1つとして加えられた（市川市都市計画課 2004：84）。

多様な対話の創出をめざすオープンミュージアムはまさに、「集い・語らい・触れあい」を重視する都市マスタープラン（北西部）の目的に合致する。社会実験「ポタライブ市川編」では、本演ばかりでなく試演や取材活動を通して多くの市民の方々との対話が実際に生まれたし、学生アシスタントのフィールドノートを見ると、ポタライブの単なる説明にとどまらず、そこに対話が生成されたことがわかる。特に、学生との対話をきっかけにして、ある老齢の女性が自らの過去の記憶を思い起こされたことに、「街づくり」としてのオープンミュージアムの可能性を感じる⁽¹²⁾。

ところで、オープンミュージアムが喚起するであろう対話主体の組合せには多様なパターンが想定できる。しかし、街づくりとして仕掛けを定着させるためには、域内の特性を踏まえた上で、重視すべき対話主体の組合せを想定しておくことよい。今回取り上げた市川北西部を人口動態の視点から他地域と比較して、この課題についての展望を最後に記しておくことにしよう。

市川市全域の人口動態を眺めていると、1つの傾向を読み解くことができる（図11）。それは、居住人口が増加する一方で、1世帯を構成する成員数（平均世帯人

(12) 手児奈霊堂に近接する亀井院にて、学生アシスタントと対話した80歳代の女性は、自らの過去を振り返りながら次のように語った。「戦争で東京から市川に逃げてくる人が多くて、私もそのうちの一人。東京から千葉へ逃げるとなると、市川を通るし、東京へも行きやすかったから、市川に移る人が多かった。市川に来てから手児奈姫の歴史を知った。市川には歴史が結構あるけど、知名度がないから、大きく取り上げられてないから、あなたたちのように市川市を紹介してくれるととても嬉しい。」

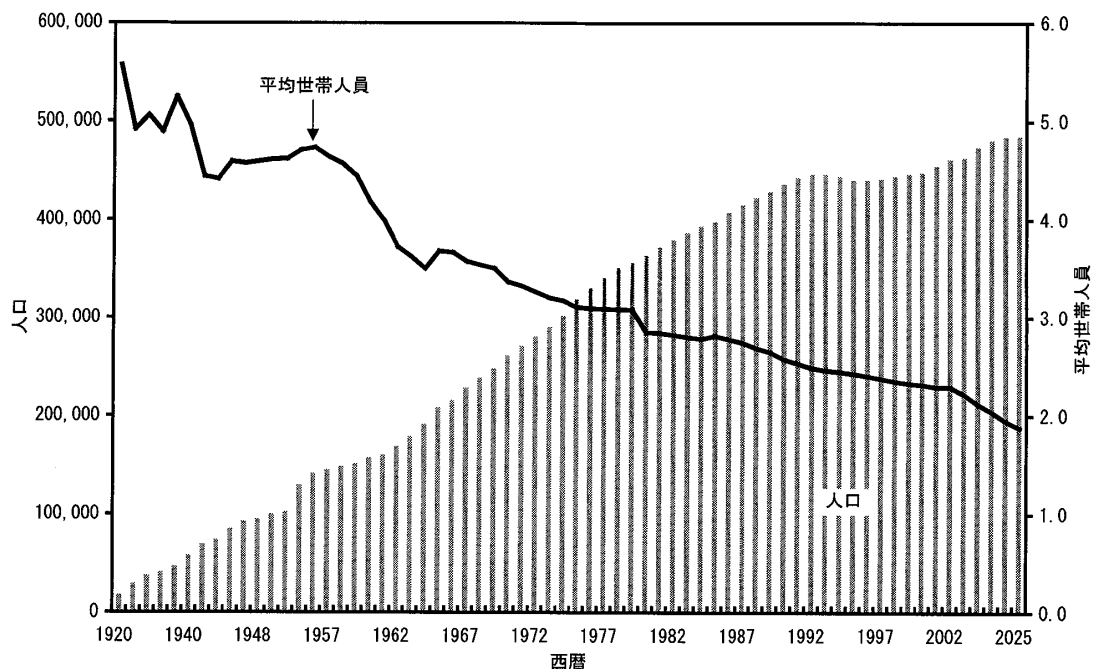


図11 市川市全域の人口・平均世帯人員の変遷と推計

員)が大正9年(1920)の5.6人を頂点に下降線をたどり、82年後の平成14年(2002)には2.3人へと半減していることである。全国平均に比べると世帯人員の減少はいまだ緩やかだが、このままの傾向が続くと2020年には2.0人を下回ると推計されている(市川市企画制作課 2001:38)。

市川市全体の傾向をもっとも良く反映する地域は、ディズニーランドの浦安市に接する南部地域である。行徳や明典を含むこの地域の特徴は、昭和30年(1955)代より埋立て事業が進んで臨海工業地帯に組み込まれたことと、昭和40年(1965)代に営団地下鉄東西線がこの地域に延伸して都市型住宅の形成が急速に進んだことである。

したがって、市川市全域の傾向でもある「人口増加」と「平均世帯人員減少」のパターンは、工場労働を担う単身世帯や都市近郊に集合住宅(マンション)を求めた夫婦世帯が域内に流入してきた結果として理解してよいだろう。すなわち、同居する家族成員が少ない若い世帯が増加したのである。

ところが、市川市内のすべての地域が同パターンの人口動態を示すわけではない(図12)。真間を含む北西部では、平均世帯人員ばかりでなく、人口もまた平成2年(1990)以降に減少の一途をたどっている(市川市都市計画課 2004:75)。域外か

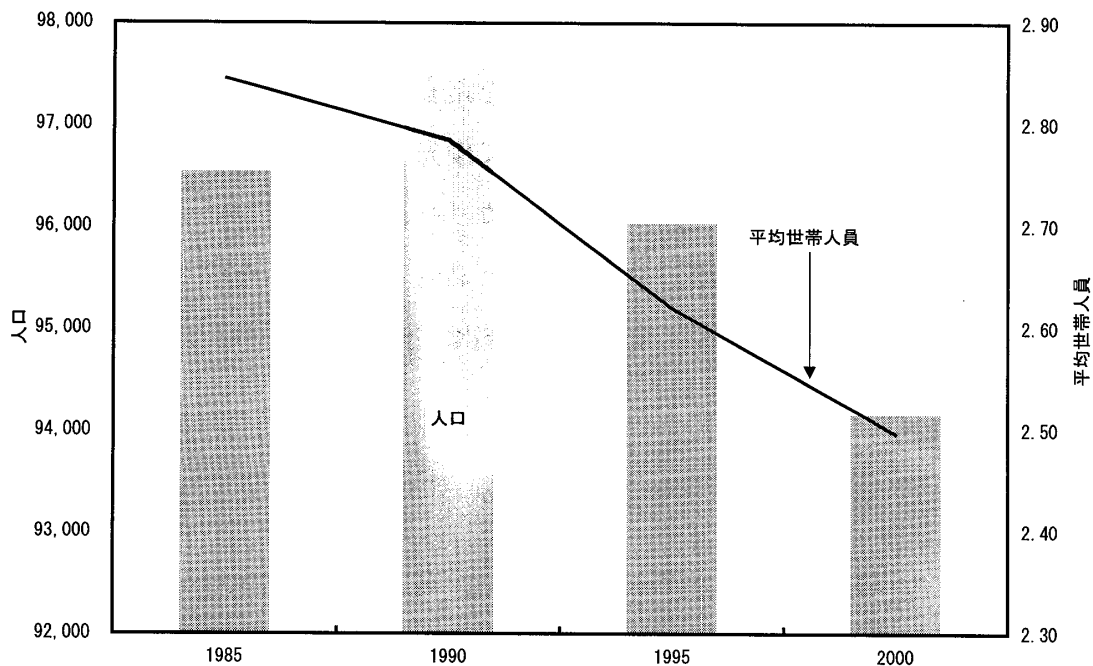


図12 市川市北西部地域の人口・平均世帯人員の変遷

らの人口流入が少ない上に、成人した青年層（息子や娘）が就労や婚姻を機に域外へ他出することによって、域内ならびに世帯内の両側面で人口減少が進行しているものと考えてよい。地域別人口の年齢構成比を比較すると、65歳以上の高齢者の割合は北西部地域でもっとも高く16%を超える（市川市都市計画課 2004：75）。市川市内では高齢化のスピードがもっとも早い地域である。とすれば、北西部における世帯人員減少は、高齢な夫婦世帯、さらには伴侶を失った高齢者の単身世帯が増加していることを示唆する。

千葉県全域の割合と比較したとき、市川市における少子高齢化はまだ低い水準にとどまっているが、国立社会保障・人口問題研究所の報告によれば、2025年から2030年にかけて約90%の自治体で人口が減少するという。65歳以上の老齢人口が全体の40%を超える自治体も三割を超えるだろうと推定されている⁽¹³⁾。少子高齢化問

(13) 国立社会保障・人口問題研究所作成「日本の市区町村別将来推計人口（平成15年12月推計）の概要」（<http://www.ipss.go.jp/Japanese/shicyoson03/t-page/top.html>）参照。人口問題は短期的に解決しえない上に、少子高齢化は納税者人口の減少、生産性や消費意欲の減退、財政・年金問題とも密接に関連した現象である。そのことを踏まえると、全体としては比較的状况が悪化していない現在（2004年）こそ、本腰を入れた対策が市川市に求められるだろう。

題に対する根本的な対応策が求められると同時に、その社会に暮らす生活者の具体的な状況に目配りする必要がある。このことを踏まえると、世代を超えた対話の創出をオープンミュージアムの社会的役割として優先すべきである。奇しくも北西部は市内でも文教地域である。各種教育機関のカリキュラムのなかでオープンミュージアムを活用することになれば、学生・生徒と高齢者とが対話を取り結ぶ仕掛けに展開してゆくことになるだろう。市川市北西部は、そのモデルケースとなりうる地域なのである。

〈謝辞〉

ポタライブの岸井大介，木室陽一，榊原純一，宮下美々，大塚麻紀，播磨徹，工藤香子，賣映紅の各氏，ならびに篠原武義氏（篠原商店店主），石田カチエ氏（自然幼稚園園長），浮谷安信氏（地藏山墓地管理者），朽木量氏（現千葉商科大学助教授）との協働なくして本研究はなかった。田中俊行氏をはじめとする市川市街づくり推進課の方々，谷地正道氏をはじめとする市川市都市計画課の方々にも多大なご協力をいただいた。また，英文サマリー作成には近藤恭子先生のお力添えをいただいた。あわせて御礼申し上げます。なお本研究は，市川市から委託された「パートナーシップによるまちづくり検討業務」（通称 I-Project）の一部として計画された。また，千葉商科大学学術研究助成（平成14年度・個人）による「市川におけるクロマツの文化景観調査」（山口）の成果，ならびに慶應義塾大学学事振興資金（平成16年度・個人 A）による「オープンミュージアムで街をつくる—文化景観を活用した地域活性化策—」（山口）の成果を含む。

参考文献

- 安藤操・綿貫喜郎・大塚米吉（編）1995『写真集／市川・浦安の昭和史』千秋社
市川市企画政策部企画政策課 2001『I&I プラン21：市川市総合計画』市川市
市川市建設局都市計画部都市計画課 2004『市川市都市計画マスタープラン』市川市
市川市史編纂委員会 1974『市川市史・第二巻：古代・中世・近世』吉川弘文館
市川市史編纂委員会 1975a『市川市史・第三巻：近代』吉川弘文館
市川市史編纂委員会1975b『市川市史・第四巻：現代・文化』吉川弘文館

- いちかわ・まち研究会（編）1999『市川まちかど博物館』
- 上田秋成 1776（鵜月洋訳註1959）『雨月物語』角川書店
- 遠城明雄・大城直樹「序章」荒山正彦・大城直樹（編）1998『空間から場所へ：地理学的想像力の探求』pp.1-7.古今書院
- 遠城明雄 1999「空間スケールと『社会的実践』—『近代性』の変容をめぐって—」
- 大城直樹 1994「墓地と場所感覚」地理学評論 67A-3, pp. 169-182.
- 暮しの手帖社（河津一哉・解説）1993『今とむかし廣重名所江戸百景帖』暮しの手帖社
- 小室正紀（編）1992『地図に刻まれた歴史と景観2 明治・大正・昭和：市川市・浦安市』
新人物往来者
- 鈴木恒男 1992「市川・八幡地域」小室正紀（編）『地図に刻まれた歴史と景観2 明治・大正・昭和：市川市・浦安市』pp. 52-67. 新人物往来者
- 関本照夫 1986「モニュメントとしての歴史」関一敏（編）『人類学的歴史とは何か』海鳴社
- 千野原靖方 1977『手兎奈伝説』崙書房
- 西尾秀生 2001『ヒンドゥー教と仏教：比較宗教の視点から』ナカニシヤ出版
- 西川智泰 1970『真間の里』亀井院
- 納富信留・溝口孝司（編）1999『空間へのパースペクティブ』九州大学出版会
- ハイデン, D. (後藤晴彦 他 訳) 2002『場所の力：パブリック・ヒストリーとしての都市景観』学芸出版社 (Hayden, D. 1995 *The Power of Place: Urban Landscapes as Public History.*)
- ホブズボウム.E. 1983「序論—伝統は作り出される」E.ホブズボウム, T.レンジャ（編）（前川啓治 他 訳）『創られた伝統』紀伊国屋書店 (Hobsbawm, E. & T. Ranger. (eds.) 1983. *The Invention of Tradition.*)
- 山本光正 1987『房総の道・成田街道』聚海書林
- Entrikin, . 1991. *The Betweenness of Place: Towards a Geography of Modernity.* Macmillan, Hampshire & London.

山口徹（慶應義塾大学文学部）
 榎沢順（千葉商科大学政策情報学部）